活動報告

トークイベント「本屋で、ぼくの本を見た」

堀田　あけみ

国際コミュニケーション学部には、文章を書く仕事をしたいと考えている学生が常に一定数在籍している。どうしてもなりたい人もいれば、できたらなりたい人もいる。彼女達にとって、自著を書店に並べることは一つの夢である。

今年度、一人の卒業生がその夢を叶えた。光文社より『一生困らない　女子のための「手に職」図鑑』を八月に上梓し、以来、売り上げを伸ばし続けている。これを機会に、実際に本に関わる仕事に就いた人の話を聞くイベントを企画した。二回の講座で、「本屋で、ぼくの本を見た」というタイトルには、いつも通う書店で自分の著書と初めて遭遇する、人生でたった一度の瞬間を凝縮させた。女子大であるにも関わらず、一人称を「ぼく」としたのは単純な語呂の問題である。

初回は、先述の卒業生・華井由利奈氏との懇談会である。十月二十二日（月）の五限に行われた。表現文化学科と中心とした8名が参加し、華井氏がどのように単著の出版に至ったのかを聴いた上で、質疑に答えてもらう形をとった。

華井氏は、卒業後すぐに印刷会社に職を得て、大学で小説を書くゼミにいたからと、コピーライターの仕事を任される。熱心に業務をこなす一方で、ライター講座にも通い、スキルと人脈を作って行った。事細かに、その経緯を知ることは、学生たちにとって、大きな参考になったと思われる。学生からは、書こうというモチベーションを保ち続けるにはどうしたら良いのか、ネタはどのように集めるのか、これから書きたいことは何かといった質問がされた。

同じ学校で学んだ先輩であり、ベストセラーの著者であるという、近くて遠い存在との懇談は、彼女たちの進路に希望を与えたのではないだろうか。

二回めは、アートディレクター・三村漢氏を迎え、表現文化学科四年の本多礼奈さんが進行を務め、アートディレクターという仕事について、また、本ができるまでについて、トークショー形式で語っていただいた。本多さんは。学業と並行して、プロの漫画家（筆名・星羅）として活動している。筆者を含め、実際に出版に関わる人間が三人いる状態で、話を進めた。

本多さんが、今回の為に描いたポスターに駄目を出して欲しい、と話を振ったときには、字の大きさや色・構図・人物の表情等が次々と指摘され、作品としてのイラストと、ポスターとの違いを具体例で示す形になった。

また、フロアからの質問では、トークの中の「クリエイターは名刺に凝りがちだが、シンプルなものを手間暇かけるのがベスト。名刺を見て、オファーが来ることもある」という発言を受けて、「差

し支え無ければ名刺を見せて欲しい」というものがあった。それを受けて、希望者には講師の名刺が渡された。名前と連絡先、オフィスのロゴのみのシンプルなものだが、活字を使って印刷されたものであった。

フロアからの活発な発言もあり、充実したイベントであった。

二回のイベントを通して、出版に関わる仕事の実像を理解し、自分がどのようにそこに関わっていけるかのビジョンを持つことができた学生もいたと思われる。

最後に、三村氏の名刺を受け取った学生は十名ほどだったが、記された連絡先に御礼を送った学生はいなかったようだ。九年前にも、三村氏の講演があったが、その際に名刺を求めてお礼状を送った、たった一人の学生が、華井氏であった。